目覚め

山本恭平

春休み僕は、スキーをしに雪山に来ていた。雪解けも始まりピーク時より雪は積もっていなかったけど、ちらほら緑が顔を出していてとてもきれいだった。そんなにスキーが上手いわけでもないので最初は、簡単なコースで滑っていたが興味本意で上級者コースに行ってみた。
それが間違いだった……。

やっぱり上級者コースは難しかった。急だったりボコボコしていたりで全くまともに滑れなかった。だが何度も何度も挑戦している内に少しずつましに滑れるようになってきた。昼過ぎになって、そろそろ帰ろうかなと思った時、コースの隅にまっすぐ下まで伸びたコースがあるのに気付いた。最後は、気持ちよく滑ろうかなとそのコースを滑ることにした。
「すげー！　気持ち〜」
思わず声が出てしまうほど最高だった。風が体に当たって、景色が変わっていく、スピードもどんどん速くなる。今まで味わったことのないスリルと興奮がそこにはあった。
調子に乗って更にスピードを上げて滑った……すると、

ビュウー

と強風が吹いて視界が真っ白になった。パニックニを起こした僕は、スピードを落とすことも忘れ滑り続けた。視界が晴れない中、まっすぐ滑れているか、どこを滑っているのかさえわからなくなった。怖かった。でも、冷静になって、そろそろ斜面も穏やかになって下に着くころだろうと思った時、視界がパッと晴れた。

ん？　と思った。
視界が晴れて空にも夕暮れが広がりまさに絶景だった。が、足元を見ると何もない。空を飛んでいた。振り返るとそこには崖が聳え立っていた。崖から落ちていた。
スキージャンプなら金メダル間違いなしの跳躍だっただろう。
「うわーーーー！」

重力になされるまま崖下へと落ちた。

なんとか命を落とすこともなく無傷でピンピンしていた。雪が解けずにかなり積もっていた所に落ちたことが幸いだった。しかし、崖を上って戻ることができるはずもなくひとまず助けを呼んでみることにした。

「おーい、だれかーいませんかーたすけてくださーい」

期待はしていなかったけど何も反応は返ってこなかった。

その場に留まるのも不安になってきたのでどうにか人のいる所を探して助けてもらおうと歩き始めた。

どれくらい歩いただろうか。あたりは、スキーをしていた場所と違ってまだ雪解けをしている気配はなく雪に足をとられてかなり疲れる。それに、レンタルで借りていた板だったので弁償とか言われても嫌だなと思って持ち歩いていたので更に疲れる。

このまま死ぬのかなと思い始めた時、洞窟があるのが見えてきた。体も冷えて限界だったので中で寒さを凌ぐことにした。

洞窟の中は、意外と奥まで続いていた。うれしいことに風も入ってこず暖かささえ感じた。

一番奥まで来た。そこにはこげ茶色の丸い物体があった。触ってみるとふかふかして暖かい。

「ええもん見つけたわ」

その物体に身を寄せ、寝ることにした。

どれくらい寝ただろうか、僕は、何かが動いたのを感じて目が覚めた。まだ眠い目をこすって動いたものを確認してみた。そこには、三メートルは、あろうかというクマがいた。こげ茶色の物体は冬眠中のクマだったのだ。夢かとも思ったが体中が凍傷で痛かった。その夢じゃない現実と目の前との恐怖で逃げ出したくなった。が、以前見たテレビでクマと対面したおじいちゃんが、

「クマ、目の前にしたら、逃げたらアカンのや。獲物や思って襲って来る。せやから自分のほうが強いことを証明したらええんや。そしたら向こうから離れて行きよる」

と言っていたので、ぼくは、腹いっぱいに力を入れて大声で叫んで威嚇してみた。

「おらーー！　俺のほうが強いんやわかってんのかー！」

クマの反応はなかった。こうなったら実力行使しかない。スキー板で思い切りぶん殴っ

てやった。しかし、毛皮と冬眠後とはいえ厚い脂肪に阻まれ、ペキッという音とともにへし折れてしまった。弁償かな、命の危機を目の前に思った。いやまだ諦めるのは早い首を振って雑念を取り除き、毎日二十回腕立てで鍛えた腕でクマの腹を殴りまくってやった。

モフモフモフ

なんともないご様子だ。

もう逃げるしかない。この、中高陸上部、短距離走で鍛えた足で走った。全力で。

二百メートルくらい走ると、外の光が見えてきた。

後ちょっと、後少しで出口……。

上着がひっぱられ前に進めない。振り返ると、そこにはクマがいた。僕は必死に上着を脱いで逃げようとした。が、抱っこされるような形で捕まった。もうどうしようもなかった。

そのままクマは、洞窟の奥へ戻っていった。死を覚悟した。

クマは冬眠していた場所まで戻って来た。

ここで頭から一口でペロリと丸のみにされるのだろうか、それとも体の一部を食べてから大事にどこかに残りをしまって保存食にされるのかそんなことばかり考えていた。

でも以外なことにクマは、僕を抱き枕がわりにして寝てしまった。

寝ていても力が強く身動きがとれない。

どうしても、逃げられないので、そのまま僕も二度寝した。

おわり